

(研究報告)

## 看護観育成の構造 (第3報)

### — A 短期大学学生の3年次における看護観の特徴と変化 —

The Structure of Nursing from a Student's Perspective (3rd report) :  
Survey on the characteristics and changes in nursing views in third-year  
nursing students of University A.

神谷美香<sup>1)2)</sup> 武藤英理<sup>1)2)</sup> 清水八恵子<sup>1)2)</sup> 須賀京子<sup>1)</sup>  
Mika Kamiya Suguri Muto Yaeko Shimizu Kyoko Suga

#### 要 旨

目的：本研究は3年次の看護学生（以下学生という）の看護観を分析し、学生の看護観がどのように変化し育成されているのか明らかにする。

方法：18名の学生を対象とし、質問紙調査を行い、質的帰納的に内容分析を行った。調査は、全領域の看護実習を修了した7月（6回目）と統合実習を修了した同年11月（7回目）であった。

結果：6回目の調査では、【対象のニーズを充足するための根拠に基づいた看護展開】【対象に寄り添う姿勢】などの5つのカテゴリが抽出された。7回目の調査では、【チーム医療の実践】【対象に寄り添い尊重する姿勢】など5つのカテゴリが抽出された。

結論：学生の看護観は、全領域実習や統合実習の特徴に合わせて変化し、形成されていた。実習を積み重ね、看護の場や対象が広がっていくことが、対象の捉え方と関わり方、看護実践内容に広がりや深まりをもたらし、学生の看護観として育成されていくと考えられた。

キーワード：看護観、看護学生、看護教育、経年的変化

Objective: This research aims to analyze the nursing views of third-year nursing students and clarifies how the nursing views of students have changed and how they have been nurtured.

Methods: A questionnaire survey was conducted comprising 18 students. The contents were analyzed qualitatively and inductively. The survey was conducted in July (6<sup>th</sup>) at the completion of nursing clinical practice in all fields and in November of the same year (7<sup>th</sup>) when the completion of nursing integrated practice.

Results: In the 6th survey, five categories [such as nursing based on patient satisfaction and patient's attitudes toward nursing] were extracted. In the 7th survey, five categories were extracted [these included team medical practice, and approaching and respecting the subject].

Conclusions: Students' nursing views changed and formed according to the characteristics of nursing clinical practice in all fields and nursing integrated practice. The places of nursing and subjects will be expanded by accumulating practical training. This will provide nursing students with an in-depth knowledge of how to perceive the patients, to interact with them, and the contents of nursing practice. Consequently, it was thought that the students' nursing views would be nurtured.

Key words : nursing view, student nurses, nursing education, secular change

---

受付日 2019.10.15 / 受理日 2020.1.8

1) 朝日大学保健医療学部看護学科

2) 前大垣女子短期大学

## I. 緒言

ナイチンゲールが初めて「看護とは何か（以下看護観という）」を言葉で示して以来、多くの国や職業団体が看護を定義し、理論家たちが唱えてきた。そして現在、その問いに対する考えは1つに定まっているわけではないものの、専門職業人として看護にコミットし、看護を実践するための基盤として求められるようになった。つまり、看護師個々の中に自己の看護観を持ち、発展させていくことが、高度化・多様化する医療ニーズを的確に捉えながら質の高い看護を提供するためには必要不可欠である。

看護師の看護観の形成についての先行研究は、終末期ケアに従事する看護師や訪問看護師、病棟の管理師長、卒業後5年目以降の看護師など、様々な状況にある看護師を対象に行われている（野戸ら、2002；小野ら、2007；栗田ら、2015；畑中ら2016）。いずれも看護観は、看護実践による経験により形成され、意識をすることで次の看護実践に変化をもたらすものであり、その繰り返しによって発展していくことを報告している。

この看護実践の質を左右する看護観は、看護師として臨床に従事して初めて培われるものではない。柳澤ら（2018）は、看護基礎教育の早期の段階から看護学生（以下学生という）の看護観を育成していくことは、社会が求める看護師としての倫理観や責任感、人間性を育むとともに、看護の意味や価値を見出し、看護への志向性を高めると述べている。長谷川ら（2012）は、学生が看護師像を現実レベルでとらえ、看護職としての価値観や倫理観を持ち合わせることは、卒業後の自己の看護実践を支え、離職率の低下につながると述べている。また、栗田ら（2010）は卒業時の学生の看護観を分析し、看護実践能力は基本的知識の上に経験するものであり、その振り返りにより看護観が形成されることを報告している。このように看護基礎教育は、看護師として適切な知識・技術・態度を修得するとともに、看護観を育成する場でもある。学生が、看護観を自らの言葉で表現し発展させていく力をもつことは、看護師として国家資格に足る看護実践力を身につけて臨床実践につなげるためにも重要である。

学生の看護観の形成は、初年次の学生や卒業時の学生を対象に調査したもの、臨地実習の前後で比較検討したものなど、多くの研究者が教育の過程を通して分析している（前田ら、2000；関谷ら、2005；関谷ら、2006；栗田ら、2010；細川ら、2006；小田ら、2015；石渡ら、2018；柳澤ら、2018）。そして、学内での専門的な講義・演習や臨地実習での経験を、学生自身が統合し自らの看護観として育成していくことが明らかとなっている。しかしながらいずれの研究も、学生のある時点での看護観や現状を報告しているものであり、経年的にどのように変化し育成されたのか、ということは報告されていない。加えて、短期大学の看護学生を対象とした看護観に関する研究も報告されていない。

そこで著者らは平成25年度より、A短期大学看護学科の学生の3年間の看護観が、学年進行とともにどのように変化し育成されていくか、授業科目との関連性や実習体験との関連性を明らかにし、効果的な看護観育成のための教育内容を考察することを目的として、横断的な研究を開始した。そして、「第1報」では1年次の看護観、「第2報」では2年次の看護観を分析し、報告した（武藤ら、2015a, 2015b）。本稿では、3年次の看護観を分析し、学生の看護観がどのように変化し育成されているのかを明らかにし、授業科目や実習体験との関連性を把握しながら考察した結果を報告する。

## II. 研究目的

A短期大学学生の、3年次の看護観を分析し、学生の3年次に考える看護観の特徴を明らかにする。そして、3年次の看護観がどのように変化し育成されているのか、明らかにする。

## III. 研究方法

### 1. 調査対象

平成25年度に1年次生であった学生の中から3年間継続して協力を申し出た者18名を対象とした。

## 2. 調査方法

無記名の自記式質問紙調査で、全ての質問に対する回答は自由記述とした。設定した調査時期になると、研究者らが学生に質問紙を配布した。学生には回答後、期日までに所定の回収ボックスに投函するよう説明した。

## 3. 調査内容

- ①現時点で考える「看護とは」なにか
- ②なぜその考えに至ったのか
- ③考えに至った具体的な事実やきっかけ
- ④自分の考えにもっとも影響したと思うこと

## 4. 用語の定義

本研究における看護観とは、「看護とは何か」という問いに対する、その人なりの看護の考え方である。

## 5. 調査期間

平成25年4月～平成28年3月

3年次は全領域の看護実習を修了した平成27年7月(6回目)、および統合実習を修了した同年11月の2回(7回目)とした。

表1. A 短期大学の専門科目の構成および調査時期

年次		専門基礎科目	看護専門科目	発展科目	調査時期
3年次	後期		老年看護学実習Ⅱ / 精神看護学実習	看護統合実習 看護研究 / 総合看護論	7回目 11月末
	前期		小児看護学実習 / 在宅看護論実習 成人看護学実習(急性期) 母性看護学実習	終末期看護論 / 看護制度論 救急看護・災害看護	6回目 7月末
2年次	後期	看護医療安全管理学 医療関係法令	成人看護学実習(慢性期) 老年看護学実習Ⅰ / 老年看護演習 母性看護演習 / 小児看護演習 在宅看護演習 / 精神看護演習		5回目 1～4月
	前期	リハビリテーション論 社会福祉論 医療情報活用論 医療生命倫理	老年看護学援助論 / 成人看護学援助論(急性期) 看護過程実践実習 / 看護過程演習 母性看護学援助論 / 小児看護学援助論 在宅看護援助論 / 精神看護学援助論 母性看護学概論 / 小児看護学概論 在宅看護概論 / 精神看護学概論		4回目 6・7月
1年次	後期	病態学 薬理学 歯科衛生概論	成人看護学援助論(慢性期) 老年看護学概論 / 成人看護学概論 成人看護演習 / 生活援助実習 フィジカルアセスメント演習 治療支援技術論		3回目 2～4月 2回目 1月
	前期	公衆衛生学 人体と栄養 / 微生物学 生化学 / 薬理学 解剖生理学	基礎看護技術論 生活支援技術論 看護概論		1回目 6月

## 6. 分析方法

6回目、7回目の調査ごとに、すべての質問項目に対する記述内容から、「看護観」に関する部分に着目しながら、質的帰納的に内容分析を行った。文脈を考慮しながらコード化し、共通点を比較しながらサブカテゴリ・カテゴリ化を行った。また、学生それぞれが、コード化された内容を考えるに至った理由に相当する記述を「看護観を導き出すうえで考えた理由と影響を受けたこと」として、抽出した。

データの解釈の確証性を確保するため、すべての分析は、質的研究の経験のある数名の研究者らとともに、ディスカッションをしながら行った。

## 7. 倫理的配慮

本研究は、大垣女子短期大学研究倫理審査委員会の審査 26-3 で承認を得て実施した。学生が1年次の時点で、研究内容の説明と参加希望表の配布を、共同研究者および単位認定者でない第三者的立場である教員にしてみた。そして、後日所定の回収ボックスに研究参加の希望表を投函してくれた学生を、3年間継続した研究対象者として登録した。

毎回の質問紙は無記名とし個人が特定されないように配慮するとともに、依頼文書を添付し、調査への参加は自由意志であり質問紙の返信をもって同意とすること、データは研究目的以外で使用しないことを明記した。質問紙の配布は、その学年の単位認定者でない教員が配布し、分析は、その時期の学生の実習や授業に対する成績評価を終えてから行った。

回収後の質問紙は鍵のかかる保管庫で管理した。また、分析のために質問紙の内容を電子化して編集する際も、データは鍵のかかる研究室内で、持ち出しが不可能なパソコンで編集し保管した。全てのデータは、調査の終了と研究成果の公表を以て破棄する。

## IV. 結果

18名から抽出されたコード数は、3年次の6回目は28コード、7回目は26コードであった。以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリを『 』で示した。

### 1. 全領域の看護実習を修了した後の看護観（6回目）

看護とは何かを分析すると、6回目は5つのカテゴリと12のサブカテゴリに分類でき、カテゴリはそれぞれ【対象のニーズを充足するための根拠に基づいた看護展開】【対象に寄り添う姿勢】【対象の人生・生活の支援】【対象の強みを活かした支援】【対象の家族を支える援助】であった。中でも、3つのサブカテゴリから構成される【対象の家族を支える援助】や、2つのサブカテゴリを持つ【対象の強みを活かした支援】は、今回新たに抽出された看護観であった。その他、【対象のニーズを充足するための根拠に基づいた看護展開】のサブカテゴリ『③根拠に基づく・専門性を高める』や、【対象の人生・生活の支援】のサブカテゴリ『②今とこれからをつなげる』も、新たに抽出された内容であった。

看護観を導き出すうえで考えた理由と影響を受けた事柄に関する記述内容は、実習での経験に関する内容が多く、特に成人看護学（急性期）や在宅看護で受け持ち患者と関わった経験が挙げられた（表2）。

### 2. 統合実習を修了した後の看護観（7回目）

7回目も5つのカテゴリと11のサブカテゴリに分類でき、カテゴリはそれぞれ【チーム医療の実践】【対象の強みを活かした支援】【対象に寄り添い尊重する姿勢】【対象にとって安全で安心な看護ケアの実践】【対象と家族の生活を支える援助】であった。7回目で新たに抽出された看護観は、【チーム医療の実践】であり、『①チーム医療』、『②（職業として）優先順位・時間管理を行う』というサブカテゴリで構成された。また、6回目で得られた【対象に寄り添う姿勢】は、『①対象を中心に考える』、『②対象に近い存在となり理解する』、『③対象の思いをくみ取り尊重する』という【対象に寄り添い尊重する姿勢】へと変化していた。同様に、6回目で得られた【対象のニーズを充足するための根拠に基づいた看護展開】の実践は、『②安全・安心な個別的なケアをおこなう』という【対象にとって安全で安心な看護ケアの実践】へと変化していた。

看護観を導き出すうえで考えた理由と影響を受けた事柄に関する記述内容は、領域実習で様々な状態の受け持ち患者と関わったことや、統合実習で臨床現場の看護師の働きを見学したこと、カンファレンスなどチーム医療の場に参加した経験が挙げられた。また、家族が入院し、自身も患者の家族としてケアを受けた経験が挙げられた（表3）。



表3. 3年次 7回目 (統合実習終了後の学生の看護観と影響をうけた理由) (n=18)

		看護とは何か	
カテゴリ (5)	サブカテゴリ (11)	コード (看護とは何をすること) (26)	考えた理由と影響を受けたこと (記述内容を抜粋)
I. チーム医療の実践	① チーム医療	・看護師全員で患者全員に安全で安心な看護を提供していくこと ・患者を中心に、チームで医療をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>統合看護実習での同行実習、看護実践を通して学ぶことができた。</li> <li>実習にて、看護の実践を見て、自分で実際に動いてみたことから考えるようになった。</li> <li>看護師の勤務の様子を見て、受け持ち以外の患者さんにもしっかりと対応し、見ており、看護師としてのあり方を見て学ぶことができた。</li> <li>病棟カンファレンスや連携をみて、看護師の役割が明確になった。病棟カンファレンスで気になる人をあげて、他職種に診てもらおう依頼したり、申し送りや要チェックのメモをあげたりしていた。</li> <li>実習を通して、チームで医療をすることで患者により効果を得られるように連携しながら行っていたため。</li> </ul>
	② (職業として) 優先順位・時間管理を行う	・現場では複数受け持ちであるため ・患者の危険度やリハビリが可能などうかかなどを判断するため ・検温を優先したりする ・優先順位、時間管理も看護の1つであると考え ・忙しい業務の中でも患者との接し方をおおそかにしないこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>統合実習を通して、優先順位を考えることの大切さを学んだ。リハビリが多い病棟で、リハビリが可能な状態がアセスメントする必要があるから。</li> <li>統合実習で看護師の忙しさを初めてしっかり見た。学生が受け持ったときのようにコミュニケーションをしっかりと取ることが難しいと分かった。でも1人1人の患者と接することも大切。</li> </ul>
II. 対象の強みを活かした支援	① 対象の力を引き出す・信じる	・対象者の持つ力を引き出す支援をすること	<ul style="list-style-type: none"> <li>実習で色んな患者を見て、看護としてどれだけケアを考え実施しても本人にやる気がない効果が見られない。</li> <li>最終的に治療をするのもQOLを上げるのも本人であるから。</li> </ul>
	① 対象を中心に考える	・患者中心に考え、どう行動しなければいけないか考えること ・患者を中心に考える ・1人1人の患者を大切にすること	<ul style="list-style-type: none"> <li>本当に患者のためにはならないから。</li> <li>今までの実習、特に統合実習では感じる事ができた。</li> <li>実習、患者により効果を得られるように行っていたため。</li> <li>1人1人の患者と接することが大切。患者さんとたくさん関わることができているのは学生の間だけだと思った。</li> </ul>
III. 対象に寄り添い尊重する姿勢	② 対象に近い存在となり理解する	・患者から一番近い存在であるため、丁寧なかかわりをし、良き理解者となる人 ・患者に寄り添うこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>申し送りと褥瘡、NSTカンファレンス、病棟カンファレンスをみて、看護師の役割が明確になった。</li> <li>実習を通して、患者と実際に触れ合い、感じた。</li> <li>患者が手術前や手術後に苦痛や不安を感じている時に、自分達はどう接し看護すればよいか考えたから。</li> </ul>
	③ 対象の思いをくみ取り尊重する	・患者とその家族の気持ちに汲み取り、尊重して、身体的、精神的なケアを行うこと ・その人の望むようになるように、その人に合った支援・ケアをしていく ・患者の意志を尊重しながら、目標を達成するためにどう介入すべきかを考えながら援助する	<ul style="list-style-type: none"> <li>知識や技術があるのはもちろん大切だが、相手の気持ちを考える寄り添うことも看護師にとってとても大切なことだと思ったり。</li> <li>実習・講義を受ける中で、退院支援であったり、看取りなどを考えることがあった。その人の望む形に少しでも沿えるような関わりをしていくことが、患者の為になるのではないかと考えた。</li> <li>患者と家族の思いを把握しなければその人に合った看護を提供できないと思ったり。</li> <li>今年の7月に身内が入院した時に看護を献身的に行ってくれた。</li> <li>身内が医療従事者と関わることが多く、その姿をみていろいろ学び思った。</li> </ul>
	① 看護過程を展開し対象全体を捉える	・患者の全体像を把握したうえで、看護師の観察や判断(アセスメント)が必要になること ・患者の全体像をとらえ、治療、方針、患者のニーズをふまえて、QOLを向上できるようにする	<ul style="list-style-type: none"> <li>現状の問題を考える時には、いつも全体像がはつきりしていないといけないから。</li> <li>実習、統合実習。</li> <li>実習を通して、いろいろな学び思った。</li> </ul>
IV. 対象にとって安全で安心な看護ケアの実践	② 安全・安心な個別のケアをおこなう	・患者全員に安全で安心な看護を提供していくこと ・患者がその人らしい生活が送られるよう信頼関係を築き、安心安全にケアを提供すること ・患者が出来ること、困難なことを把握して出来るところは向上するように出来ないところは補うように介助する	<ul style="list-style-type: none"> <li>統合看護実習での同行実習、看護実践を通して学ぶことができた。</li> <li>信頼関係を築くことで小さな気づきができるため。自分が逆の立場になったと考えるとそのような看護を提供してほしいから。</li> <li>実習を通して、毎日関わっていく事で小さな変化が発見できたり、患者が自分の思いを言ってくれるようになった。</li> <li>全体カンファレンスでの意見交換から。</li> <li>患者と家族の思いを把握しなければその人に合った看護を提供できないと思ったり。</li> </ul>
	③ 根拠に基づく専門的知識をもつ	・疾患や看護などの医療知識を持ち、患者を支えること ・ケアは根拠に基づいて行う ・患者の状態に応じてケアを提供すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>疾患の知識がないと患者の状態を把握できないから。</li> <li>患者の全体を知ろうと思えば、生活、生活習慣、生食歴なども意識して知る必要があるから。</li> <li>実習で日々変化する患者の観察ケアがとても重要だと学んだため。</li> </ul>
V. 対象と家族の生活を支える援助	① 対象の生活を重視する	・その人がいまいきいきと生活できるように支援すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>3年間の看護学科での学びによって、実習や本や映画、今までの看護観アンケートに記したこと。人と話したこと聞いたことから。</li> <li>医療者なので、病気を安全に治療し回復にもっていくのは大前提で、看護は、その人の生活を尊重中という制限が多いときでもその人自身の生活でできるような支援することだと考えるようになった。</li> </ul>
	② 対象と家族の意志を尊重する	・患者・家族の意志を尊重しながら援助する ・患者とその家族の気持ちを汲み取り、尊重して、身体的、精神的なケアを行うこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>患者と家族の思いを把握しなければその人に合った看護を提供できないと思ったり。</li> <li>今年の7月に身内が入院した時に、心配や悲しみで疲れている私たち家族のことも気にかけてもらい、それが私にとってはとてもありがたかった。</li> </ul>

## V. 考察

著者らは、A短期大学看護学科の学生の看護観が、学年進行とともにどのように変化し育成されていくか、入学時から同じ学生を3年間継続して調査してきた。1年次では、個人の身近な経験から看護を捉えていたところから、学問として専門的な知識・技術・態度を学び、実習で統合されることで、学生の看護観が変化してきた(武藤ら, 2015a)。2年次では各領域の看護学を学び演習や実習を行うことで、“あらゆる健康レベルの対象”“生活の質”“対象の思い”といった対象の捉え方が科学的に整理され、具体的になった。また看護実践では、“全体像を把握”し個別性があることを認識した上で、既習の知識や技術を用いて行動したことで、看護観に深まりが見られた(武藤ら, 2015b)。本稿では、1～2年次から6回目、6回目から7回目の調査で抽出された「看護観」の特徴と「その変化の様相」に着目し、3年次の学生の看護観がどのように変化し形成されていくのか、授業科目や実習体験との関連性を把握しながら考察した。

### 1. 全領域の看護実習を修了した後の看護観の特徴 (6回目)

2年次の5回目の調査から3年次の6回目の調査までの間の学修として、学生は全ての領域実習を3か月間連続して行う。6回目の調査は全領域実習が終了した直後であり、学生は各領域の特徴を理解しながら、様々な状況にある受け持ち患者を持ち、看護を提供することや考える実践を繰り返してきた。その経験が、対象の捉え方や関わり方、看護実践に広がりや深まりをもたらした。看護観につながっていくと考えられた。

対象の捉え方では、2年次で得られた“生活の質”“対象の思い”といった対象を看護の視点で把握するときに重要となる見方(武藤ら, 2015b)を含めて、【対象の人生・生活の支援】という時間的な広がりを見せた。つまり、「(看護をするには)入院前までの対象の生活・思いを理解し、入院中の変化、退院後の変化の全体をみながら関わること」や「入院中や退院後の社会復帰ができるように関わる。」、「先を見据えて関わる。」といった記述がみられるように、対象をある1時点の生活者としてだけではなく、対象には歴史があり、今があり、先があるという連続した生活者として捉えて対象の全体像を理解し、看護する必要性を見出ししていた。加えて、6回目の調査では新たに【対象の家族を支える援助】というカテゴリが加わり、看護の対象は、2年次の“あらゆる健康レベルの対象”(武藤ら, 2015b)といった個人だけでなく家族にも広がっていた。これは、「小児で母親の不安を聞いたときに家族のケアが必要だと思った」「在宅では家族の頑張りを認めていくことが重要」と、看護観を考えた理由と影響を受けたことで述べられているように、その領域の看護の特徴でもある看護実践を実際に経験したことが、学生の看護観に影響を与え、形成されたと考えられた。

対象への関わり方をみると、看護とは【対象に寄り添う姿勢】でもって対象の不安や苦痛を支えるだけではなく、【対象の強みを活かした支援】という、対象の持つ力を信じて引き出したり活用したりする関わり方へと広がりを見せていた。そして、看護の対象への働きかけの選択肢が広がるとともに、看護実践は具体的かつ現実的な深まりをみせ、今回最も多くの記述がみられた、『個別性を理解する』や『対象のニーズを捉えて目標を設定する』といった【対象のニーズを充足するための根拠に基づいた看護展開】につながっていったと推察された。また今回学生は看護実践の中でも、より良い看護を提供するには自身の専門的な知識や判断力を高めることやケアに根拠を持ち介入することが必要であることを実感していた。このことは、学生が看護は専門職であり、対象の多様化したニーズに的確に対応するための高度かつ科学的な看護技術の修得や看護実践の在り方を常に考え自己成長し続ける職業であると位置づけていると考えられた。

以上より、対象の捉え方の広がりや、対象の現在の状況を的確に把握できるとともに変化への気づきを早めることができる。また、対象の個性や状況に合わせてどのように看護的なアプローチをするかという対象への関わり方が広がり、個別的かつ具体的で明確な目的をもった根拠ある看護展開といった看護実践に深まりをもたらしたと言える。

### 2. 統合実習を修了した後の看護観の特徴 (7回目)

7回目の調査は統合実習が修了した段階であり、統合実習での体験が対象との関わり方や看護実践に強く影

響を及ぼしていると考えられた。

対象との関わり方としては、看護とは、『患者を中心に考える』こと、『対象に近い存在となり理解する』こと、『思いをくみ取り尊重する』といった【対象に寄り添い尊重する姿勢】をもつという、対象との寄り添い方に深まりがみられていた。このカテゴリは、1年次の3回目、2年次の4回目で抽出されたカテゴリ（武藤ら、2015a, 2015b）が内包される概念になっており、学生は今までの実習体験から、いかなる看護を実践する際にも求められる看護の対象に向かう本質的な姿勢に気づき、科学的に整理され形成されたと考えられた。

次に、看護実践が対象を主体として、根拠に基づき専門的かつ個別的に展開される必要があることは6回目と同様に述べられていた。対象一人一人に看護ケアを行う上で大切とする看護の本質は変わりがないことを示している。7回目の調査では、看護実践は【対象にとって安全で安心な看護ケアの実践】という、対象の「安全」「安心」を考慮する視点が加わっていた。さらに、新たなカテゴリとして、看護を【チーム医療の実践】として捉えていることが挙げられた。これは、A短期大学での統合実習が、就職後の臨床現場で求められるような実践的な動きを学修する内容であったことが強く影響しているといえる。学生は、病棟管理の実際を学び対象個々へのケアは「安全」で「安心」であることが大前提にあることや、医療・看護チームの一員として行動し、多職種と看護職との違いを認識し、看護の役割を明確にしていた。そして複数の受け持ち患者を持ち、カンファレンスや申し送りに参加することで、優先順位や時間管理を考えた看護実践の必要性を実感し、看護チームのメンバーとして行動すること、継続して看護の質を担保する役割があることを学んでいた。このように専門職としての自己の位置づけを明らかにして役割を認識したことで、学生は看護を職業として認識し始め、現実的な看護のイメージが形成され、看護観として育成されたと考えられた。

### 3. 看護基礎教育で形成される看護観

本研究で得られた3年次の学生の看護観を、卒業年度を迎えた学生を対象とした先行研究とで比較してみると、栗田ら（2010）は、4年次の卒業予定者の看護観は【対象のもつ力を引き出す支援】【その人らしさを尊重した支援】【生き方・人生への支援】などのカテゴリが抽出され、臨床で求められる看護の基本的な概念は卒業時に形成されていることを報告している。また、栗原ら（2002）は、4年次の学生の実習報告書から看護観を分析し、看護の対象を家族全体として捉えるという認識が形成させていることや、情報の共有とチームによる協働が看護の質を高めるという気づきが、チーム医療の中の専門職者としての自己の位置づけを明確にしていることを報告している。本研究結果からも類似した要素が挙げられており、専門職業人として看護を実践するための基盤となる看護観が、3年間の看護基礎教育を経て育成されてきたといえる。

また、今回3年次の学生の看護観の育成に影響した要因は、臨地実習での経験であった。学生の看護観の形成には臨地実習が一番の契機になることは既に周知されていることや、今回の調査時期が実習直後であったため影響が強く出ている可能性は考えられるものの、今回全領域実習や統合実習の特徴によって学生の看護観が変化していくことは明らかであった。したがって学生の看護観の形成には、看護実践の経験を積み重ねることが重要である。実習で看護の場や対象が広がっていくことが、対象の捉え方と関わり方、看護実践内容に広がりや深まりをもたらし、学生の看護観として育成されていくと考えられた。そのため、看護基礎教育において教員は、学生が看護実践の経験が記憶に残り、積み重ねができるような実習ができるように、実習の目的・目標を設定し、学生に理解してもらい関わりが必要である。更に、既習の学習内容と看護実践がつながるような指導をしていく必要がある。

## VI. 研究の限界と今後の課題

本研究は、1年次から継続して協力を申し出てくれた18名の学生の調査結果であり、調査人数の限界がある。また質問紙は自由記述であり、学生の中には文章で表現することを苦手とする学生も存在するため、自己の看護観を表現しきれなかった可能性がある。そのため、得られたデータ数に限界がある。そのため、学生の特性を踏まえた研究手法を吟味する必要がある。また、本研究はA短期大学の学生であり、調査は1施設



に限定されている。そして、修業年限は3年であり、教育内容や方針が大学とは異なる。看護基礎教育の大学化が進み、大学を卒業して看護師となる学生が増えてきている中で、今後は看護大学生に焦点をあてて、看護観がどのように変化し育成されていくのか調査していくことが求められる。

## Ⅶ. 結論

A短期大学の3年次の学生の看護観を分析した結果、7月の6回目の調査では、学生は各領域の特徴を理解しながら、様々な状況にある受け持ち患者を持ち、看護を提供することや考える実践を繰り返してきた経験が、対象の捉え方や関わり方、看護実践に広がりや深まりをもたらした。看護観につながっていた。

11月の7回目の調査では、学生は統合実習で専門職としての自己の位置づけを明らかにし、看護の役割を認識した。看護を職業として認識し始め、現実的な看護のイメージが形成され、看護観として育成されたと考えられた。

3年次の学生の看護観は、全領域実習や統合実習の特徴に合わせて変化し、形成されていた。実習で看護の場や対象が広がっていくことが、対象の捉え方と関わり方、看護実践内容に広がりや深まりをもたらした。学生の看護観として育成されていくと考えられた。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、3年間の長期にわたる調査に協力を申し出てくれた学生の皆さまに心より深謝いたします。彼女たちの活躍を期待し、心から応援しています。また本研究を想起し、A短期大学の学科長として学生を温かく見守りながら看護を教授するとともに、教員をまとめ、研究指導に惜しみない知識と時間を提供してくださった栗田孝子先生を心より尊敬し、深謝いたします。

本研究において、開示すべき利益相反事項はない。

## 文 献

- 長谷川美貴子 (2012). 看護学生における職業社会化と職業意識の関係性. 淑徳短期大学研究紀要, 51, 167-184.
- 畑中純子, 伊藤収 (2016). 看護観が体験から発展するまでの看護師の思考のプロセス. 日本看護科学会誌, 36, 163-171.
- 細川つや子, 名越恵美, 安福真弓, 掛谷益子 (2006). 看護観形成と臨地実習における今後の課題. 吉備国際大学保健科学部研究紀要, (11), 15-21.
- 石渡智恵美, 菱刈美和子 (2018). 周手術期実習におけるICU・HCU看護実習を体験した学生の学びと看護観に関する研究. 帝京科学大学紀要, 14, 111-116.
- 栗原保子, 小野美奈子, 稲田夏希 (2002). 学生の看護観の発展過程に関する研究 — 4年次生臨地実習報告書の質的分析をとおして. 宮崎県立看護大学研究紀要, 3(1), 9, 18-26.
- 栗田孝子, 橋本麻由里 (2010). 学士課程の看護基礎教育を考える — 卒業時の学生が捉えた「看護観とその形成に影響を及ぼした事柄」から. 椋山女学園大学看護学研究, 2, 17-22.
- 栗田孝子, 星野純子 (2015). 病棟看護師長の看護観に関する質的帰納的分析. 日本看護医療学会雑誌 = Journal of Japan Society of Nursing and Health Care, 17(2), 34-41.
- 前田ひとみ, 永田まなみ, 大重和代, 神谷文子, 杉谷かおる, 野田忍, 松本麻子 (2000). 臨地実習が看護学生の看護観に及ぼす影響. 熊本大学医療技術短期大学部紀要, 10: 11-19.
- 武藤英理, 栗田孝子, 神谷美香 (2015a). 看護観育成の構造 (第1報). 大垣女子短期大学紀要, (56), 107-112.

- 武藤英理, 栗田孝子 (2015b). 看護観育成の構造（第2報）. 第19回日本看護管理学会学術集会抄録集, 289.
- 野戸結花, 三上れつ, 小松万喜子 (2002). 終末期ケアにおける臨床看護師の看護観とケア行動に関する研究. 日本がん看護学会誌, 16(1), 28-38.
- 小田亜希子, 武藤雅子, 小林幸恵 (2015). 看護大学生の看護観に関するテキストマイニングを用いた分析. 活水論文集, 看護学部編, 3, 3-21.
- 小野若菜子, 麻原きよみ (2007). 在宅高齢者を看取る家族を支援した訪問看護師の看護観. 日本看護科学会誌, 27(2), 2\_34-2\_42.
- 関谷由香里, 酒井淳子, 青木光子, 岡田ルリ子, 徳永なみじ, 岡部喜代子 (2005). 看護学生の「看護」に対する認識の変化（第1報）. 愛媛県立医療技術大学紀要, 2(1), 29-35.
- 関谷由香里, 和田由香里, 青木光子, 岡田ルリ子, 徳永なみじ, 岡部喜代子 (2006). 看護学生の「看護」に対する認識の変化（第2報）. 愛媛県立医療技術大学紀要, 3(1), 51-58.
- 柳澤恵美, 林真理子, 小松法子, 今井淳子, 能見清子 (2018). 初年次看護学生が日常生活援助を受けた当事者の語りから得た看護観. 創価大学看護学部紀要, 3, 25-34.